

平成28年度 附属学校研究支援・特色化にかかわる事業実施報告書

事業の名称	附属特別支援学校における研究の成果を全国へ発信する取組(4)
事業実施代表者名	校長 小栗 祐美
実施附属学校名	北海道教育大学附属特別支援学校
事業内容 (実施内容について、 1,000字程度で記述)	<p>①平成28年7月に北海道教育大学釧路校で行われた第11回北海道特別支援教育学会において、前年度の研究主題であり、本校で1月に実施した研究フォーラムを基にして、「北海道の特別支援教育の授業力を考える～子どもたちがわかる・できる・楽しむ授業を目指して～」をテーマとし、自主シンポジウムを開催した。また、平成28年9月に新潟市で行われた第54回日本特殊教育学会において、前年度の研究主題にかかわる北海道の特別支援教育の授業力向上・授業改善に関するアンケート調査を基にしたポスター発表と、本年度の研究主題である「生活を豊かにしていく力を育む授業づくり～自ら学び、仲間と高め合いながら、自分の意思で活動する児童・生徒の育成を目指して～」を基にしたポスター発表の2本を行い、本校研究の取り組みの成果を全国、全道に向けて発信した。</p> <p>②平成28年11月25日(金)に本校公開研究協議会を実施した。研究主題は、「生活を豊かにしていく力を育む授業づくり～自ら学び、仲間と高め合いながら、自分の意思で活動する児童・生徒の育成を目指して～」とし、全国の附属特別支援学校、全道の特別支援学校や特別支援学級を対象に、本研究の内容とその実践について授業を公開し、研究総論及び学部研究の発表、研究協議、実践事例等のポスター発表(30本)、附属札幌小中ふじのめ学級のポスター発表、講演会(岩手大学教授 名古屋 恒彦氏)を行った。本学釧路校、函館校の先生方にも助言者として御協力いただき、170名を超える参加者があった。</p> <p>③附属札幌小中ふじのめ学級との研究交流については、本年度は、同じ平成28年11月25日(金)に、ふじのめ学級の研究大会と本校の公開研究協議会が行われることになってしまったため、双方において、それぞれの研究の取り組み等をポスターにてのみ発表した。将来の研究に向けての日常の交流については、平成28年12月16日(金)にふじのめ学級へ本校教諭2名が訪問し、また、平成29年1月19日(火)には、ふじのめ学級の教諭3名が本校</p>

	<p>に来校し、それぞれの学校の児童生徒の様子を観察し、授業の体験もして、次年度以降の交流の歩みを進めることができた。</p> <p>④学部案内、入学者募集ポスターの制作および配布</p> <p>本年度から入試委員会と進路・地域支援センターが中心となり、学部案内を制作し、本校入学希望者、学校見学者、教育関係者に配布した。学部見学会には、小学部 26 件、中学部 30 件、高等部 62 件が参加した。また、入学選考に関わり、入学希望者の増加を目指し、入学者募集ポスターについても本校の各学部の特色を入れて興味や関心を引くように制作し、関係機関に 341 部配布した。</p>
<p>成果と課題 (活動の成果と課題について、500 字程度で記述)</p>	<p>①特別支援学校についての評価は、文部科学省の施策を先導的あるいは実践的に行うほか、学会等で発表することで、その評価を受けるといった面も多くある。本年度も可能な限り、日本特殊教育学会と北海道特別支援教育学会へ参加し、自主シンポジウムやポスター発表等で本校の研究や実践を広く全国、全道へと発信することができた。参加された方々からいただいた多くの意見や指摘、感想は、今後の本校の研究や取り組みを継続、発展させるために必要不可欠である。また、学会に参加して、他の発表を多数見聞きし、様々な情報を本校に持ち帰ることにより、今後の本校の研究テーマの方向性を示唆してくれるものと確信している。課題は、次年度以降も学会への参加を継続させ、研究の成果や取り組みを引き続き広い地域へ発信していく必要があることであり、そのためにも研究予算の確保を是非継続させていただきたい。</p> <p>②本年度実施した公開研究協議会は、本校が進める新たな研究の 3 年次計画の 1 年次目にあたり、改定される次期新学習指導要領の考え方も取り入れ、北海道唯一の大学附属の特別支援学校として、北海道の特別支援教育の課題を明確にし、先導し、本学函館校のみならず釧路校の先生方の協力も得て、公開研究協議会の中で、様々な形で地域へ発信できたことは有効であったと考える。参加者からも今後への期待が数多く寄せられていた。課題は、より多くの参加者が参加しやすい日程の設定と、研究のさらなる発信をとおして、今後地域とどのようなつながりができるかということである。</p> <p>③附属札幌小中ふじのめ学級との研究交流を、本年度は互いの研究会等でポスター発表をとおして行えたことは、附属の特別支援学級や特別支援学校がどのような研究を行っているかをそれぞれの地域で発信することになり意義が大きかった。本年度は、双方の研究大会と公開研究協議会が重なってしまったため、次年度は</p>

	<p>日程の調整をきちんと行いたい。また、本年度から実施した日常の交流を通じて、共通の研究テーマを模索できるように次年度以降も相互交流を継続していき、それを実現させていくことが課題である。</p> <p>④学部案内を更新し、入学者募集ポスターを関係機関に配布したことは、結果としては、本年度の本校入学希望者増加に必ずしも結び付かなかったが、次年度以降も本校への入学希望者を増やすための一つの方法として、今後もこの取り組みを継続していく必要がある。</p>
<p>今後の発展性 (残された課題の解決方策及び取組の方向性について、500字程度で記述)</p>	<p>本校の任務や本学の中期目標・中期計画の実現へ向け、大学との連携をさらに強め、引き続き本校の研究の様々な取り組みを全国、全道、地域へ発信していくことは必要なことであり、附属学校の重要な役割として期待されている。そして、その内容については先導的であり、地域のニーズに応えられるような具体的かつ実践的なものでなくてはならない。そのためにも学会等への参加や発表、ふじのめ学級との研究交流等を推進し、継続させて、本校教職員の資質や能力の向上に結び付け、それを地域に還元することで、地域の教育力の向上に寄与していきたい。また、広報活動等にもさらに力を入れ、本校小学部、中学部、高等部の教育についても、その一貫性を重視した学部案内等を充実させ、本校入学希望者増加への様々な取り組みにつなげていきたい。</p>
<p>事業の公表状況 (事業をHPで公開した場合、又は新聞等に掲載された場合、当該媒体名、掲載日等を記入)</p>	<p>本校ホームページにて、公開研究協議会の概要を掲載中。</p> <p>函館新聞(12/2)及び北海道通信(今後掲載予定)に公開研究協議会の様子が掲載。</p> <p>その他、本校ホームページ上に、研究活動において研究の外部発表への取り組みと、入試情報において出願の状況を随時更新掲載。</p>

(注) 当該事業に係る写真等の参考となる資料がある場合は、この事業報告書に添付すること。